

イーヴリン・ウォーの『アビシニアのウォー』と『スクープ』における フィクションとルポルタージュの関係

三枝 和彦

1. はじめに

第2次世界大戦に向かってヨーロッパ諸国間の政治的緊張が高まりを見せる中、ファシスト党を率いるムッソリーニが独裁政権を敷くイタリアは、1935年10月にエチオピア侵略を開始し、翌36年5月に同国を併合した。侵攻が宣言されてからは100人を超える特派員が戦況を伝えようと首都アディスアベバに滞在し、イーヴリン・ウォー (Evelyn Waugh, 1903-66) も『デイリー・メール』(*The Daily Mail*) の戦地特派員として派遣されていた。30年代のウォーは、外国に出かけては旅行記を書き、更にそこから着想を得て小説を創作するというサイクルを繰り返していたが、戦地特派員として訪れた際も、旅行記『アビシニアのウォー』(*Waugh in Abyssinia*, 1936) に続き、小説『スクープ』(*Scoop*, 1938) を上梓している。ジャーナリズムを茶化したのめした喜劇的諷刺小説として好評を博した『スクープ』は、「小説の薄皮を被った明白なルポルタージュ」 (“actually a piece of straight reportage, thinly disguised as a novel” Knightley 187) とも評されるように、実録との境界が曖昧な小説だと言えそうだ。本報告では、『アビシニアのウォー』と『スクープ』を併せて読むことによって、ウォーの作品におけるフィクションとルポルタージュの関係、虚構と事実 (実録) の関係を探ることを試みた。

2. イーヴリン・ウォーとエチオピア

ウォーがエチオピアを初めて訪れたのは、1930年11月に開催されたハイレ・セラシエ1世 (Haile Selassie, 1892-1975: 在位 1930-74) の戴冠式に『タイムズ』(*The Times*) の公式特派員として派遣されたときのことである。友人からエチオピアと戴冠式について聞かされたウォーは強い興味を覚え、特派員として渡航する手はずを整えた。首都アディスアベバに1週間ほど滞在し、式と関連行事を取材した後はエチオピア国内を旅した。続いてケニア、ウガンダなどの英国保護領を周遊し、翌年3月に帰国した。この時の体験は旅行記『僻地の人々』(*Remote People*, 1931) にまとめられ、更に『黒いいたずら』(*Black Mischief*, 1932) という小説を書き、ブラック・ユーモアを交えてエチオピア国内の様子を諷刺的に描き出している。

3. 『アビシニアのウォー』－戦争ルポルタージュの失敗作－

イタリアのエチオピアへの侵攻が濃厚になっていた1935年、ウォーは『デイリー・メール』の戦地特派員として、再び当地を踏むことになった。前回の訪問が半ば偶然で突発的であったのに対し、今回はかなり計画的だった。エチオピアの専門家自認していたウォーは、イタリアとエチオピアの関係がヨーロッパの耳目を集めるにつれ、自分が戦地特派員として派遣されるべきだと考えた。イギリスは19世紀後半にエチオピアと外交関係を結んでいたり、戦火を交えたりしたことがあったが、20世紀半ばにはほとんど関心を持っておらず、知識がある者も限られていた。そのため、ウォーはエチオピア関連書物の書評を書いたり、エチオピアとイタリアの情勢について論評したりするなど、専門的知識を有する知識人として振る舞っていたからである。ところがウォーは世論の大勢に反してムッソリーニ支持を表明していたために、また、戦地特派員としての経験がなかったために雇い主はなかなか現れず、数少ないムッソリーニ支持派の新聞『デイリー・メール』から、ようやく戦地特派員という身分を手に入れた。

旅行記『アビシニアのウォー』の第1章「エチオピア問題に関する知性ある女性の手引き」 (“The Intelligent Woman’s Guide to the Ethiopian Question”) は、エチオピアに関する書物を引用しながら、エチオピアの歴史や社会について解説し、現在進行中の問題について論じている。こうした導入部が用意されていることから、ウォーは真面目な戦争ルポルタージュを書こうとしていたと考えられる。しかし、エチオピア国内の移動が制限されたため戦場に近づくことができなかつたり、ジャーナリストとしては未熟なウォー自身の不手際があつたりで、満足な取材成果を上げることはできなかった。また、イタリアがエチオピアを占領した後もムッソリーニ支持を変えないどころか、その姿勢を強めてしまう。『アビシニアのウォー』の最終部には、占領後に再訪したエチオピアのことが記述されているが、イタリア軍が建設する道路がエチオピアに近代化をもたらすものとして称賛されている。こうしたことから、『アビシニアのウォー』は販売部数が伸びなかつただけでなく、「ファシズムのパフレット」というレッテルを貼られて手ひどく叩かれたのである。

4. 『スクープ』－虚構を事実に変えるジャーナリズム－

『スクープ』は商業的にも大成功を収め、現在でも人気を維持しているが、喜劇的なビルドゥングスロマンという趣が大きな要因だろう。だが、近年はポスト・トゥルースやフェイクニュースとの関連で言及されることも少なくないように、事実と虚構という観点から興味深い小説でもある。代表的なのは、主人公ウィリアム・ブート（William Boot）が仕事仲間から聞かされる、伝説的なジャーナリスト、ウェンロック・ジェイクス（Wenlock Jakes）にまつわるエピソードである。ジェイクスはバルカン半島のある国の首都で起きた革命取材のために列車で向かうものの、誤って別の駅で下車してしまう。しかし、戦火の街を鮮明に描写する記事を書き、そこから新聞社へ送ったところ、ジェイクスへの信頼からその記事は信じられてしまう。駆け付けたジャーナリストたちも調子を合わせて同じような記事を書いたため、一週間もしないうちに本当に革命が起きてしまう。そしてこれが「新聞の力」（“the power of the press” 67）なのだという。荒唐無稽な話のように聞こえるが、現代のネット社会において虚構を事実と信じ込ませようとする事例を考慮すれば笑ってもいられない。

虚構を事実に変えてしまう「新聞の力」は、『スクープ』の物語展開においては英雄的なジャーナリストの影響力を印象付けるエピソードとして紹介されているのだが、ジャーナリズムの諷刺小説という枠組みの中では痛烈な皮肉に他ならない。ウォーと同世代の作家ジョージ・オーウェル（George Orwell, 1903-50）の「スペイン戦争回顧録」（“Looking Back on the Spanish War,” 1942）を参照すれば、その意味が一層明瞭になる。オーウェルは「新聞ではどんな事件でも正確に報道されることがないことに気づいていた」が、スペイン内戦に従軍して「新聞が事実とはなんの関係もない、普通の嘘に含まれている程度の関係すらもない報道をする」ことを目撃した。オーウェルは、戦争を報道する新聞記事が事実とわずかな関係すらないことを事実として報道し、それを知識人たちが疑うことすらなく本気で信じ込み、その報道に沿うように事件を付け加えることを糾弾する（167-68）。オーウェルは「党派色」というイデオロギーに沿うように情報が捻じ曲げられると言っており、その点でより複雑な問題を指摘しているが、『スクープ』とオーウェルのテキストは問題意識を共有していると言えるだろう。

5. ウォーとジャーナリズム／事実／虚構

事実と虚構に新聞が及ぼす影響については、ウォーの2作目の小説『卑しい肉体』（*Vile Bodies*, 1930）に印象的なエピソードがある。主人公で駆け出しの作家アダム（Adam）はゴシップコラムの執筆を担当することになるが、ネタに困って想像上の人物について記事を書き、好評を博する。好奇心が満たされれば、誰についての記事なのかなど読者は気にしていないと悟ったアダムは、プロヴナ（Provna）というポーランド貴族の彫刻家を思いつく。プロヴナの作品をニューヨークのメトロポリタン美術館が購入しようと交渉しているなどと書いたところ、「新聞の影響力はすごいもの」（“Such is the power of the Press” 95）で、プロヴナの作品が続々と輸送され始めたという。これに味を占めたアダムが更に架空の人物をでっちあげると、それも実在の人物として思い込まれてしまう。このように『卑しい肉体』は、人々が虚構の記事を事実だと信じ込み、翻弄されるさまを提示することで、事実と虚構が織りなす危うい関係を面白がっているようなのだ。

『卑しい肉体』に描かれた事実と虚構の関係は無害なほら話のように聞こえ、戦争を描くルポルタージュとは比較すべき性質のものではないように見えるかもしれない。確かに、戦場の事実を捻じ曲げて報道する新聞と、それに踊らされる知識人を弾劾するオーウェルの声とはだいぶ趣が異なっているように聞こえる。しかし、『スクープ』におけるジャーナリズムに対する諷刺、特にジェイクスがでっち上げた記事が情勢を動かしたエピソードと並べてみれば、そこに共通点が見えてくる。ウォーのコミカルな小説世界で取り上げられると、真面目な問題も真面目に見えなくなってくるのかもしれないが、それこそがウォーが本領を發揮できる書き方だと言えるだろう。真面目な問題を滑稽と不真面目さの衣に包んで提示することで、笑いの中で深刻な問題を認識させる、ウォーの小説にそのような力を有しているのだ。

引用文献

- Knightsley, Phillip. *The First Casualty: The War Correspondent as Hero and Myth-Maker from the Crimea to Iraq*. Revised and updated 3rd edition, The Johns Hopkins UP, 2004.
- Orwell, George. “Looking Back on the Spanish War.” 1942. Reprinted in *Shooting an Elephant and Other Essays*, by Orwell, 2009, pp. 157-83.
- Waugh, Evelyn. *Scoop*. 1938. Penguin, 2000.
- . *Vile Bodies*. 1930. Penguin, 2000.
- . *Waugh in Abyssinia*. 1936. Penguin, 2000.